昭和55年／1980年
B版
50円
10月19日(日)
発行10月18日

夕刊フジ

発行所 ©フジ新聞社 1980
東京都千代田区大手町1-7-2
〒100 TEL(03)231局7111大代表

<日刊>
第3601号
昭和44年2月28日第三種郵便物認可・同53年11月14日国鉄首都特別扱承認新聞紙561号

京都新聞杯・京成杯3歳S確定

女子短大生襲われ？失跡 静岡

3面に記事

巻返すか ロッテ
V達成か 近鉄

◇パ・プレーオフ第3戦（大阪球場）

東京競馬確定

「江青は男狂い」の狙い

月末にも四人組裁判
悪女キャンペーンが予告する厳罰

またしても中国お得意のキャンペーンが始まった。こんどは“悪女・江青”の旧悪暴露作戦。例によって裏で中国当局がリモコン、ねらいは今月末か来月初めにも開かれるという四人組裁判に備えての地ならし工作らしい。大陸はもちろん、香港の中国系新聞まで動員して、江青夫人(六五)の悪業のかずかずをPR。その暴露内容は、ナンと彼女の男遍歴にまで及んでいる。事実、女優時代の彼女の芸名「藍蘋（らんぴん）」をもじり「乱紊（らんびん）」と呼ばれたほど男関係が派手だったようで、香港のある中国系紙などはそのあたりを初めて紹介する江青伝記の連載を開始した。江青の男にふちどられた生涯とはー。

女優・藍蘋時代の江青。イプセンの名作「人形の家」の主人公ノラ役（上）などにもふんした。（一九七七年三月二十一日付米「タイム」誌から）右下は「新晩報」に連載の「江青野史」

ローティーンで初夜捧げ“身も心も団結”した四人組時代まで数十人と……香港紙など

江青の旧悪といえば、四年前の10月クーデターに失敗、四人組が逮捕された直後にもひとしきり中国内外のマスコミを賑わした。≪江青は北京の文物管理所から金時計、玉器、エロ小説を含む書籍などを94回にわたり、タダ同然の金額で買い取った≫≪毛沢東の親族を迫害し、毛主席の一家は離散≫etc。

この時の江青批判は、にわかに没落した権力者への反動みたいなものだったが、十月に入ってからの相次ぐ旧悪暴露は、明らかに四人組裁判を前にした中国当局の世論工作とみられている。

江青研究家として知られる帝塚山大の伊原吉之助教授は「カベ新聞と同じで、当局の発表にすると不都合な時、こうした形でまず世論をつくるのは北京の常とう手段だ」という。

ともあれ、その内容ー

≪江青は自分が演じたかった劇の主役を得た名女優、王瑩（おう・えい）さんを恨んだ。文化大革命が始まるや、王さんは投獄され、「黒いスター」のぬれぎぬのまま獄中で死んだ≫（上海紙「文滙報」10月9日付号）

≪秦城監獄につながれている江青は怪気炎をあげており、当局は看守が女史の毒気にあてられるのを懸念して一週間で別の看守に交代させているという≫（香港の中立紙「中報」10月13日付号）。

≪江青は幼少時、酒乱の父親から逃れ母親と家出したが、そのかけ込んだ先は実は、のちに毛主席と江青の仲をとりもった故康生氏（元党副主席）の実家だった。まだ幼かった江青はここで康生氏に初夜をささげたがやがて捨てられ、それをきっかけに彼女の男遍歴がはじまった≫（香港の夕刊紙「新晩報」10月6日付）

同紙は連載の形で、江青の男遍歴をとり上げ、19歳で上海に出て来た女優・藍蘋（江青）の色香に惑わされた男が起こした、派手な自殺未遂騒ぎの一件まで紹介。

藍蘋は上海ですぐ左翼劇評家の唐納（とう・のう）にとり入って、彼の推薦で主役に抜てきされた。二人は同棲したが、軟弱タイプの唐納と勝ち気な江青とソリの合うはずもなく、藍蘋はわずか半年で天津へ逃げた。追いかけてきた唐納が天津の旅館で自殺未遂。

こんなふうに江青を通りすぎていった男たち、いや江青の方が次々と通りすぎていった男たちの数については、驚くなかれ、数百人説まである。もっとも先の伊原教授は「それはちょっとオーバーで数十人じゃないですか」という。

死刑避け、終身禁固か
文革派の殉教者扱いを警戒

張　春橋

姚　文元

王　洪文

その中で、ある程度の期間一緒に暮らした相手としては、先の康生と唐納、毛沢東との間に、さらに二人はいたらしい。

一人は生地、山東省の省都済南の省立実験劇院で女優の卵として研修中だったハイティーン時代のことで、無名の青年。

そして二人目が、青島大学の図書館員をしていた18歳の時で、相手は黄敬（こう・けい）という同大学共産党細胞のリーダー。このほか、章泯（しょう・みん）という左翼の演出家の名前も挙がっているが、つかの間の恋人となると、これはもう浜の真砂ほども…。

「確証はありませんが、これまでに流れたウワサとしては、毛沢東にめぐり合うまでの延安時代初期や、うんと飛んで四人組時代にもあります」（伊原教授）

四人組時代のウワサとは、江青は張春橋(六三)、姚文元(四九)、王洪文(四五)という文革の同志たち全員と、文字通り身も心も“団結”していたばかりでなく、革命京劇の男優、卓球界の星・荘則棟とも…、という話を指している。火ブタを切った“旧悪暴露キャンペーン”では、このあたりまで出て来る可能性十分というわけ。それにしてもかつて毛沢東夫人として中国に君臨した彼女の過去をここまでほじくるとは、しつこいというか、なんというか。

ところで、江青ら四人組の上海の民兵組織を動かし武装クーデターを計画したーという「反革命」の罪。江青は女優から女帝への道を夢みたのだといわれており、現にクーデター成功の暁には、自ら党主席に就任する党・国務院リストを用意していたと伝えられる。

しかし、今月末にも開かれる裁判の罪状からいえば、江青の異性遍歴や性格の残忍さなどは、本筋と縁もゆかりもないわけだ。だからこそ“逆魔女狩り”なんて声も聞こえてくるのだが、中国当局はいま江青を何がなんでも希代の悪女に仕立てなくてはならない。その事情とは、こうだ。

「ポスト鄧小平時代がどうなるか、文革派がまた力をもつのではないかーといまの中国の指導者層が強い不安をいだいているんだと思いますよ」というのは東京外大の中嶋嶺雄教授。同教授によると文革の生き残りグループの間で“鄧小平死後に会おう”といったささやきが交わされたりしているそうだ。裁判の大部分が“非公開”になりそうなのも、公開の場で江青女史に余計なことをしゃべられては…という不安に加え、旧文革派への配慮やら、江青女史に同情が集まっては逆効果という当局の“読み”があるようだ。

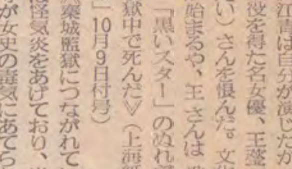
さて、“悪女”江青を待つ罰（判決）だが、中嶋教授はこうみる。

「中国には楊貴妃の昔から、女帝型権力の横暴さに対して怨念のような憎しみがあり、江青はその象徴。だから、厳罰に処さなければ納まらないでしょうが、殺すことはできない。今、裁く側にいる連中だって、毛時代には似たようなことをしていたわけですから」

先の伊原教授も「殺せば彼女を不満分子の殉教者に仕立てることになりかねません」という。

江青は、無期懲役か終身禁固で残る生涯を暗い獄中で過ごすことになるだろう、というのである。

好評 ☆発売中☆



この道45年を数え「コンドーム博士」の異名を持つ――不二ラテックス社長 岡本忠大 著
●男のための知恵袋
『だいじょうぶ?!』
―コンドームとジョイフルセックス―
¥700 (送料120円)
かんき出版 振替東京0-62304
〒102 東京都千代田区麹町4-4 ☎03(262)8011